

【小説部門・最優秀賞】

鼠色の女神

大阪つくば開成高等学校 第3学年 島田 実璃

私は工場で働きながら消えた彼女が運ばれてくるのを待っている。

私の彼女は美しい人だった。非の打ち所がない彼女は童話の中のお姫様を連想させた。むしろ物語の中でも出来すぎていると批判されそうなほど現実味のない完璧な女性だった。

彼女と私が知り合ったのは初夏の蒸し暑くなってきた夜のことだ。どうにも寝苦しくベッドから抜け出した私はサンダルを突っかけて夜の散歩に出かけた。のびた襟ぐりを引っ張って胸元に風を送り込むと先程よりは幾分涼しくていい気持ちだった。しかし川沿いを気の向くまま歩いているうち考えていたより遠くまで来てしまっていた。そろそろ帰らなければとアパートの方向に進路を変えたそのとき、私はこの世の何よりも美しい人を見た。

その女性はまっさらな黒髪を靡かせ周りの空気を心地よく冷やしながらこちらに向かって歩いてきていた。

赤子の頃から一度も転んで泥を付けたことがなさそうな人だった。丁寧に織られた白生地の布で包まれているのが似合う。もちろん成長したら白無垢だ。現在の彼女が身にまとっているのはどちらでもなく装飾のない紺のシンプルなワンピースだったが、それも光を発するほどの白い肌を際立たせていた。背筋はすらりと伸びてどこもかしこも真っ直ぐだ。一歩足を踏み出す度に清廉な水の波紋ができていくのが見えるような歩き姿だった。鹿の蹄のように控えめにこつりこつりと踵を鳴らす音が聞こえるまで近づいてくると思わず息を呑んだ。非常に顔の造形が整っていることに気づいたからだ。その端正さは人形のようなのだが、薔薇色の頬は生きている人間の艶やかさを感じさせる。ふと歩みをとめた彼女はとてもゆっくり瞬きをした。繊細な睫毛は一本一本カールがかかっている閉じられた薄い瞼の下で眼球が震えているのがわかった。舞台の幕が上がったようにつやりとした瞳が現れる。新鮮な果物を餡で薄くコーティングしたみたいに瑞々しい眼球は美味しそうで、そっと舐めてから歯を立ててみたい衝動に駆られた。同様に完璧な場所に配置されている唇は軽く引き結ばれていたが、何かを声に出そうとして控えめに開けた瞬間金魚のように真っ赤な粘膜がちらりと見えた。

「大丈夫ですか？」

「……え？」

見惚れていたため、彼女が私に話しかけていることに気づかず不自然な沈黙をおいてしまった。

「急に立ち止まられたから」

「ああ、はい、いえ……」

私のたどたどしい言葉に少し笑った彼女はもう数歩こちらに歩き親しい友人同士程度に

まで距離を詰めた。

「暑いし、ぼうっとしちゃいますよね」

そして白魚のような手をついと伸ばし私の額に熱を測るようにあてた。私は動揺で腰を引きかけたが彼女の手がひんやりと心地いいもので常識を吸い取られたように動く気が失せ、額を擦り寄せてしまった。

「やっぱり熱い」

手をあてたまま更に私に一步近づいた彼女はそう呟いた。呼吸の音が聞こえるほど真正面から向かい合っている。これはもう友人を通り越して恋人の距離感だ。私は心臓が激しく脈打つのが感じた。まるで彼女が熱いと判断したから身体がそれに合わせて急激に発熱しだしたかに思えた。

「熱を出しているのに夜に一人だなんて危ないですよ」

「あなたも気をつけた方がいいです.....綺麗だから攫われたりとか」

私はろくに思考せず頭に浮かんだままのことを口に出してしまっていた。同じ女とはいえ彼女の方がよっぽど危ない。

「わたしは平気ですよ、もしそうなっても攫った相手が後悔します」

彼女は笑った。後悔ってなんだろう。しかし意味を考える前に彼女が「どなたか迎えに来てもらったらどうでしょう、ご家族とか」と言ったので慌てて頭をふった。

「そんな大袈裟なものじゃないです、それに一人暮らしですし、明日も仕事ですし」彼女は子供の興味の対象がすぐ移り変わるように不意に「お仕事ってどんなことされるんですか？」と質問してきた。

私は少し躊躇ったが正直に告げた。

「害獣の解体です」

「害獣の解体.....それは大変なお仕事ですね」

彼女は嘔み締めるように繰り返してから労わるように優しく私を見つめた。

彼女は興味深そうに私の生活や嗜好を訊ねながらごく自然に私に寄り添い帰り道を共に歩いた。家に居たころの蒸し暑さが嘘のように風は爽やかにそよぎアパートの近くまで戻ってくるのは僅かな時間だった。

「また会えませんか」

「いいですよ」

私は後ろ姿を見送りながら引き止めたときに触れた肌の柔らかさを思い返していた。咄嗟に掴んでしまった彼女の細い手首は指の形に僅かに赤くなっていた。私はあまりの脆さに恐ろしさを覚え二度と乱暴な真似はしないと心に誓った。

それからもときどき彼女は濁った川を眺めながら静かに立っていて、運良く会えた夜はたわいもない話をした。しかし彼女には予定という概念が無かったし私と彼女の偶然が被る割合はとても低かった。私にも仕事があり徹夜し続ける訳にはいかない。けれど、もしも今日に限って彼女がいて貴重な機会を逃してしまっていたらと考えると、睡眠をとると決

めた日でも無為に一晩中寝返りをうつことになる。

仕事が被る度にどこかしらがだるいと愚痴っている同僚に目ざとく隈を指摘され現状を話すと、私より二十は年上に見えるおしゃべりな女は「ほらね」と勝ち誇ったように言った。「いくらあんただってこの仕事続けてダメージなきやおかしいわよ」

私は彼女のたるんだ胸元に湧き出ている汗を眺めながらそうであって欲しいと願った。これは名も知らぬ女性への恋煩いなんかではなく、仕事のストレスの蓄積で発現した正常な反応だと信じたかった。しかし仕事には大した不満もなく馴染んでいたし今更無自覚に弱るなど考えづらいことだった。

私の仕事は十七の頃からずっと変わらず巨大鼠の解体だ。あちこちに巨大化した野生動物が現れ被害を起こす昨今、全長三メートルはある鼠が害獣として駆除されることも珍しくない。そういった獣たちの死骸を引き取り適切に解体し使える部位は研究所に流しその他は処分する。私はその中の鼠担当。まずは薄汚れた灰色の毛を掻き分け背丈ほどある針を突き刺し血抜きをする。体毛を剃って皮膚に切り込みを入れても血が吹き出さなくなったらぶよぶよとたるんだ皮を剥ぎ部位ごとに切り分けていく。臓器は大抵の場合変色していて酷い悪臭を放ちぬめぬめ滑る。心臓や胃袋の重さを量って冷凍室に並べると使えない残りを細かく刻んで焼却炉に詰め込む。そしてタンパク質が焼ける匂いを嗅ぎながら新たな巨大鼠の死骸を作業台に運び込むのだ。到底一人では成し遂げられない作業の為、推奨されているのは鼠一匹につき十人だそうだが、慢性的な人員不足によりこの工場では多くいて五人だ。害獣解体は後暗いところは一切ないにも関わらず世間では下に見られている節があるからだ。文字通り汚れ仕事の極みであったし仕事内容は慣れが唯一の手段で大した知識も技能もいらない。学が無かったり過去に問題を起こした人間が行き着く場所という偏見があり、実際そういう事情を抱えた人達も多かった。私も碌に高等学校は行かなかつたし言い返せない。十七歳の頃、親族はちっとも期待に応えない私に怒り家を追い出すと生活費も学費も一切出してくれなくなった。

そんな息苦しい家にも一人変わり者がいた。それは私の母方の叔父だ。私達は叔父と姪にしては年齢も近くなにより家の理想から外れた者同士だった。家を出てから実の両親とも連絡をとっていないが、叔父とだけは今でも不定期に会っている。

今夜も叔父からの誘いを受けて狭い居酒屋で待ち合わせをしていた。先に席についていた叔父は既に酒が回っているようで顔が赤らんでいた。彼の前には空のジョッキがふたつ並んでおり到着した私に気づいて発した第一声は「やっぱりお前は俺に似て美人だな」だった。

生真面目だった叔父が少しおかしくなったのは当時付き合っていた女性が海で溺れて死んでからだ。叔父は婚約も済ませ仕事は評価され順風満帆な日々だった。しかしその女性と結婚前の余暇で海辺に小旅行に出かけた際、事故は起こった。荒い波に叔父が流されてしまったのだ。泳げない叔父を助けにきたその女性は非力な細腕で必死に叔父を担いで泳ぎ、救助に来た他の観光客に預けると自分はそのまま暗い海の底に沈んでしまった。

叔父は大量に海水を飲んだ程度で後遺症もなく助かったが、まるで自分の命と引き換えたかのように婚約者を失ったという現実を受け入れざるをえなかった。しかし傷心だろうと様子を伺う親族達の予想を裏切り叔父はすぐに恋人をつくって連れてきた。新しい恋人は前の彼女の二倍近く体積がありそうな巨漢の男で、ケチャップで汚れた野球チームのロゴが入ったTシャツを着ていた。引き合わされた親族たちは呆気に取られしばらくの間口を利くこともできなかった。叔父は親族一同の前で恥も外聞もなく男にねだって愛していると繰り返させ、挙句の果てには彼と過ごす時間が欲しいから現在の仕事を辞めると言い放った。見せつけられた親族達はやがて立ち直ってより一層家業に精を出してくれるはずと慰めあっていた自分たちが馬鹿らしくなり彼の心情を理解することを早々に諦めた。

結局叔父はその大男とは長く続かず一ヶ月後には独り身に戻ったが、試みは一時の気の迷いではなかったようでそれから性別も外見も問わず様々なタイプと交際と破局を繰り返して現在は僅かな独り身期間の最中だ。口端からビールと涎を垂らしながら叔父はお決まりの文句を嘆いた。

「味が居ない世界なんて生きるには辛すぎる」

「沢山いるでしょ」

「違うんだよ、俺だけに一途な人が必要なんだ。あの味を覚えちゃったから」

テーブルに突っ伏した叔父を見ながら私はビールを一口だけ飲んだ。このまま置いて帰ろうか迷いかけたところで見透かしたように叔父ががばりと起き上がり「こんなくだらないことでお前を呼んだんじゃないよ」と呂律の回らないまま言った。叔父は口周りを紙ナプキンで拭いて姿勢を正したが正面から見ると若干右に傾いていた。

「仕事変える気ないか？」

予想だにしていなかった叔父の提案に私はかなり驚いた。叔父は知り合いから若い求職者を紹介してくれと頼まれたらしい。叔父は仕事内容や条件を話しながらゆらゆら揺れだしておりどこまでまともな話か怪しかったが、確かに信頼出来る職場だと断言した。

「お前だって一生バケモンを解体し続けるつもりじゃねえだろ。これを機に良いんじゃないか」

「わかった。考えておく」

弱いくせに追加で酒を注文しだした叔父に帰りはタクシーを呼ぶように言い残して店を出た。今から向かえば間に合うだろうか。

今夜も彼女は美しかった。世界中の名画から美しく見える角度を集めてきたみたいだ。

「ずっとお願いしようと思ってたことがあるんです」

斜め後ろから見惚れていた私に振り向いた彼女は改まった口調で言った。

「わたしのことを解体してくれる？」

「.....私は鼠専門で、人間どころか猿も解体した事がなくて」

「人間の形のままじゃないのでそこは平気です。ただ汚いものを見せてしまうことになるから申し訳なくて。ごめんなさい」

「待って、待ってください」

「わたしはもう少ししたら鼠になるんです。だから鼠になったあとの事をお願いしたくて」

理解の範疇を超えた言葉に思考が停止した私をよそに、彼女は何度も読み込んだ詩の一節を暗唱するようにすらすらと信じられない言葉を紡いだ。

「わたしは小さな頃から一定の年齢まで成長すると巨大な鼠に変化するって教えられてきたんです。もう時期は近いです」

私は必死に理解しようと努めた。すべて聞かなかったことにしたい気持ちを堪え深く息を吐いた。しかし人間が害獣になるなんて事例は今までに無いはずだ。そもそも害獣は正常な動物の個体が異常に巨大化かつ獰猛化したものであり、体内の構造から人間とはまるで別物だということは仕事柄よく知っている。

「そんなの聞いたことがない」

「そうですね、他に居ませんし。この体質は世界にわたしだけらしいです」

かすれた声で彼女に対して初めての否定を絞り出した私に彼女はさらりと返した。

「理由は何なんですか」

彼女は困ったふうに眉を下げた微笑んだ。

「わかりません。わたしは生まれた時から全てにおいて異常だそうです」

なぜか私は説明にもなっていないその一言で納得した。なるほど、彼女は異常なまでに整っていた。本来人間であるべきではなかったのだ。彼女は内緒話をするように私の耳元に囁いた。

「あなたはわたしをよく美しいって褒めてくれた。わたしはとても嬉しかったんです。だってわたしも美しいものが好きだから。長い間、誰も入ってこない部屋であなたが諭えてくれた絵や音や置物に囲まれて静物みたいに生きてきました。わたしもその一部のように扱われるのが一番楽だった」

どこかの照明が一つきりの部屋に宝物みたいに隠される彼女の姿を思い浮かべた。呼吸する胸だけが小鳥のごとく微かに動いていてその他はゼリーで固められたように空間が止まっている。

「わたしは自分の身体がねじ曲がっていくのに耐えられないんです。鏡を見て自分を醜いと感じる日が来るのがたまらなく怖い。わたしは今まで美しいという理由でこの世の怖いものから護られてきました。わたしにはそれだけが事実で全てなんです」

「そんな恐ろしいことが起こって正気でいられる自信が無いの。きっとすぐに意識を失って獣の本能のままに暴れ回ります。そうしたら誰もわたしのことなんか好きでなくなってしまう。だから、わたしが誰からも嫌われる鼠になって殺されて処理場に運び込まれたとき、あなたに綺麗さっぱり燃やしてもらえたら良いなって初めてお会いした時から思っていたんです」

彼女は眉を下げて微笑んだ。まったく庇護欲をそそる表情だった。小動物や赤ん坊なんか比にもならない。私は衝動のままに彼女を抱きしめた。薄い身体はすっぽりと私の腕の中に

収まったが身長は彼女の方が少し高いことに初めて気がついた。揺れた髪から甘い香りがする。深く吸い込むと桃源郷に居るようだ。

「いいよ、あなたが美しいことに理由なんかなくて」

どれだけ善良に生きても神から選ばれる人間は限られている。あなたが美しいのは天からの贈り物だ。特別である証だ。鼠に変えられてしまうのもきっとそうだ。たとえ他人のことを外という奇妙な世界を構成する一部としか思っていようと損なわれることはない。私のことを特別に愛していなくてもまったく構わないのだ。返答は帰ってこなくても映画や音楽を愛せるように簡単なことだった。

「貴方の中身が空っぽでも私がその分埋めつくすほど愛します」

「だから貴方は今はただ何も考えずここに美しくいるだけでいいんです。その後は私が全部引き受けます」

彼女の滑らかな頬を手の甲でそっと撫でた。彼女は安堵したように柔らかく微笑んだ。手の中に包み込んだ蕾が咲いたようだった。それは寒い地でも暑い地でも育たない希少な花に似ていた。私の手のひらの温度が心地いいのかと思うと嬉しかった。

この日以来彼女は現れなくなった。翌日の早朝、叔父に電話して転職の話を断った。目的が出来たので辞めるわけにいかなくなったと。叔父は私の荒唐無稽とも言える話を黙って聞いてくれて「そうか」と言った。

「ただ、お前の話が事実でその子を見つけられたとしてもそれは既に鼠の死骸だぞ。いいのか？」

「いい」

「さすが俺の姪だよな、馬鹿になる定めなんだ」

叔父は海で死んだ女の替わりを未だに探し続けており、わたしはこれから鼠になった彼女を探す。確かに世界一愚かな叔父と姪かもしれない。

かくして私は工場で働き続け、二年の月日が流れた今も毎朝六時に出勤し巨大鼠を焼いている。

「次、行きます」

覇気のない報告の声に返事をし振り返った。そこにはずっと待ち続けた彼女がいた。台に横たわった痩せた鼠で、蛇の抜け殻のような尻尾は切り落とされて脇に添えられていた。手を止めて凝視している私を見て同僚が怪訝そうに言った。

「どうしたの？普通の鼠じゃない。」

確かに巨大なだけのただの鼠の死骸だった。彼女の天女のような外見の面影はなく、駆除される鼠としても醜い部類だった。骨が浮きでるほど痩せているしおそらく死んでかなりの時間が経った目は濁っていた。それでも私はこの鼠が彼女だと思った。周りがざわつき出しても私は涙が出てくるのを堪えられなかった。

「この人です、探していたのはこの人です」

別の同僚に呼ばれてきた実務のリーダーは鼠に縋り付く私を見るとため息をついた。悪

用だけはくれぐれもしないようにと注意を受け一も二もなく頷くと私以外の作業員は早めの休憩として部屋を出て行ってくれた。焼却炉が唸る音だけが響く世界で私は曲がったまま冷たく硬直してしまった彼女の背をそっと撫ぜた。軽い力で灰色の毛は抜け落ちダニにでも喰われたのか炎症だらけの地肌が露になる。彼女は生前の美の代償を取り立てられたようにみすぼらしかった。

「私の前から消えて二年、この姿でよく頑張ったんですね。もう大丈夫、汚くないですよ。」

私は垢が詰まった耳にも聞こえるようにゆっくりと語りかける。何度も何度も繰り返し彼女を撫でそっと瞼を閉じさせた。白濁した目玉が隠れると心做しか先程よりは穏やかに見える。

「お疲れ様、次に目を開けた時は貴方は綺麗な姿に戻ってますよ。そうしたら今度はもっと早く会いましょう、気が狂うほど長い時間をかけて貴方を愛でさせてくださいね」

私はずしりと重い鋸を手を取った。焼却炉が嬉しそうに一層大きく唸りをあげる。